北里柴三郎に学んだ優れた研究者（1）　北島多一

伝染病研究所は、北里の研究を引き継いで多くの優れた後進の研究者を輩出しました。その中でも、北里の右腕として北里を支えたのが、北島多一でした。

北島多一博士
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念室

北島は、1886(明治 23)年に帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部。以下、表記は東京大学及び東大とする）に一番の成績で合格して、授業料免除の特待生として入学しました。お雇い外国人のベルツから内科・病理学・精神医学を学び、同じくお雇い外国人のスクリバから外科・皮膚科・眼科・婦人科の学問を学んだ北島は、四年間の努力の結果首席で卒業を決めると、進路について頭を悩ませます。熟慮の末に、北島は、北里の下で先進の細菌学を学ぶことを決心しました。こうして北島は、北里が香港でペスト菌を発見した 1890（明治 27)年に、愛宕町の伝染病研究所に入所します。

この北島の伝染病研究所入所ですが、決して簡単な決断ではありませんでした。これには、北里と犬猿の仲だった東京大学教授・青山胤通が大きく関わっています。特待生の北島に目を掛けてきた青山は、卒業する北島が東大に残って教授になるものとばかり思っていました。なぜなら、東大生にとって東大教授は憧れの的であり、多くの学生は東大教授になることを目指して勉強に励んでいたからです。そのため、青山は、首席で卒業をする北島に対して、大学に残る意思を改めて確認するまでもないと考えていたのです。しかしある日、青山は、北島が伝染病研究所に入所する意向であることを耳にします。手塩にかけて育てた優秀な教え子が、よりによってライバルの北里の下に行くことを知ると、青山は慌てて北島を部屋に呼び入れて、考え直すように説得しました。青山は、「もし北里のところへ行けば、東大を生涯敵に回すことになる。東大に残れば、ドイツ留学や大学教授等の栄達の道が将来的に約束されている」と諭すと、北島に東大に残るよう強く迫りました。北島は以前から、青山率いる東大と北里が円満な関係ではないことをよく知っていました。信頼する知人に相談しても、大学に残るべきだと助言する人もいました。しかし、北里の研究者としての誠実な生き方に憧れを抱いていた北島は、前途は非常に多難かもしれないが、覚悟を決めて伝染病研究所の門を叩いて入所したのでした。入所後しばらくすると、北島の父が陸軍会計監査をしていた関係もあり、陸軍軍医総監の石黒らが、北島を京都帝国大学医科大学の教授に推薦し、北島を伝染病研究所から引き離す誘いをかけてきました。北島はその話を丁重に断ると同時に、これを機に、北里について行く気持ちが以前にも増して深まりました。

1895（明治 28）年、東京にコレラが流行し、多くのコレラ患者が東京府広尾病院に隔離収容されました。この緊急事態に対応するため、東京府が伝染病研究所に広尾病院の患者の治療に当たるよう要請すると、広尾病院の院務監督に北里が、広尾病院の院長に北島がそれぞれ就任します。病院では北里と北島の主導によって日本で初めてコレラの免疫血清療法が行われ、193 名の患者のうち 129 名が完治するという画期的な治療成績を収めました。

その後北島は、伝染病研究所の第一回留学生に抜擢されると、1897（明治 30）年 10 月にドイツ留学を果たします。当時マールブルク大学の教授を務めていたエミール・ベーリングの下で血清療法の研究に取り組み、特にジフテリア以外への血清療法の応用研究を行いました。帰国後は、ジフテリアをはじめとする多くの感染症の免疫血清の製造を牽引し、血清療法の普及拡大に大きく貢献する等、まさに北里の右腕となって北里を支え続けました。北里の死後には、北里の後を継いで北里研究所二代所長、慶應義塾大学医学部二代部長、日本医師会二代会長にそれぞれ就任し、その職責を全うしたのです。